東京大空襲と予科練

原　正之助（夏　見・63歳）

それは昭和二十年三月十日のことでした。私は当時十八才で、千葉市から東京駅前の運輸通信省防衛気象課へ通勤していました。

前夜（三月九日夜）東京大空襲があり、江東地区に大被害を受けました。千葉市からも東京の空が大きく赤く映えているのが見えましたが、大したニュース報道はなかったように記憶しています。

私はその朝、いつのも如く鉄カブト、防毒面を携え、巻脚胖姿で千葉駅を七時頃の電車で東京へ向かいましたが、電車は市川駅で運転打切となってしまいました。仕方なく歩いて出勤することとして鉄道線路上を東京へ向いました。

江戸川鉄橋のあたりから何人かの被害者と行違いになりましたが、防空頭巾や衣服は焼こげ、鍋釜、ラジオなどを手に放心状態で歩いているように見受け、大変異常なものを感じました。荒川鉄橋を渡り、平井の街から家屋が焼失し、焼跡から熱い粉塵が吹付けてくる中を行きました。沿線の日東硫曹という化学工場も焼け、猛烈な刺激臭を発していたのも強い印象を受けました。しかし、それから先で、私は大変悲惨な出来事に出会うことになりました。亀戸付近から江東橋への精工舎前大通りへ出まして、間もなく、道路上に点々と樹木の焼焦げのようなもの（そんなことがあろうとは私の全くの想像外であったため、そのように見えたのですが）がありました。これが焼死された方々の遺骸と気付いたのは一瞬の後で、江東橋方向に向い幾百幾千ともしれず路面一面をうめていました。馬も犬も猫も全てを焼尽したというもので、周囲に動くものなく、すべて停止してしまって、焼トタンなどが風に揺れている程度の深閑とした、また太陽の淡い光が、やけに明るく感じる異様な空間をなしていました。私はこの不気味さに動くこともできず、正視することもできなくなりましたが、やがて通りかかった陸軍の装甲自動車の後に従って、半ば慴目しつつ、この場を歩みました。

市電線路の敷石から歩道まで至るところに焼夷弾が突き刺さっており、空襲の物凄さと火の雨の中を逃げ迷った人々の無残さが思いやられました。

私はその後間もなく海軍飛行予科練習生として土浦海軍航空隊に入隊しました。

ここでは毎日が厳しい訓練の連続で、海軍精神というものを叩き込まれましたが、ある日、特攻基地に転属となった先輩隊員を見送り、そのなかに涙しつつ隊門を出て行く隊員もあって、華やかに宣伝された予科練、特攻隊の裏の一面に考えさせられるものがありました。また、土浦海軍航空隊は、その六月十日に大空襲を受け、施設の大被害と多数の死傷者がでました。親しい戦友が一塊の肉片のみとなってしまうなど危うい経験もいたし

ました。私はその後、近くの谷田部航空基地に配置され、そこで終戦を迎えました。

土浦において爆撃を受けた日、千葉市にも空襲があり、現在のＪＲ千葉駅周辺にあった国鉄千葉機関区、千葉女子師範学校等が爆撃を受け、ここでも多数の死傷者がでましたが、私の父もこの千葉機関区で勤務中被爆して死亡しました。

その後、千葉市は七月に空襲を受け市の中心街が焼失いたしました。その時、私の母と幼い弟妹達は、焼夷弾や火の粉が降るなかを海岸に避難して、危うく被害を免れています。

父の死亡は私が軍務にいるということで、家族は報せてきませんでした。復員して仏壇の父に帰還報告をすることになり、涙がこぼれました。私が予科練に志願入隊したことによって、父は子の一人を失ったものと思ったとのことで、隊門まで見送りに来て、別れたときの寂しげな顔が今でも想い出されます。

